

# 閑人閑話

KANJIN KANWA

伊藤礼

## 第二話 松江行き

夜の十時、寝台特急列車サンライズ出雲号は東京駅九番線ホームを静かに離れていった。この列車は、名前が示すとおり島根県の出雲を終着駅とする。

わたくしは松江に行こうとしていた。寝台は九号車の二階、二十五号個室。ドッコイシヨと寝台に腰を下ろして、まず靴を脱ぐ。靴というものは現代生活に欠かすことのできないものであるが、これを脱いだときの快感というか安心感というか肉体的解放感はなかなかのものであると言わなければならない。

ほっとして周りを見回す。さして広い部屋ではないが、ベッドのほかに荷物置きスペース、ハンガー、小さいけれどお弁当を食べるぐらいのことはできる机

世界を相手に松江で戦いをはじめるといいうのに、東京で昼寝をしているというわけにはいかない、ということなのである。

\*

ここで、この選手権戦についてすこし説明しよう。世界アマチュア囲碁選手権というのは、世界五十八カ国・地域から集まった代表選手たちが四日間にわたって戦うものである。そしてそれが今年には日本の松江で開かれることになったのだ。

次に平田選手と世界アマチュア選手権戦について。平田氏のこの試合への出場は初めてではない。過去何度も出場している。そのうち一回は優勝している。こういった平田選手の活躍ぶりを要領良くまとめた記事を産経新聞、五月二十五日号に見ることができたから、以下に引かせてもらおう。タイトルは「日本代表は最高齢84歳 世界アマチュア囲碁選手権」である。

「29日から松江市で開催される『第32回世界アマチュア囲碁選手権』に、歴代最高齢となる84歳の平田博則さん（東京都福生市）が日本代表として出場する。世界アマ選手権は4日間で8局打ち、勝ち数とポイ

ゴミ入れ、鏡、ラジオ、毛布がある。小世界ができていた。この部屋に寝転んでいけば、明日の朝には松江に着いている。スリッパに履き替え、上着とズボンを脱いでハンガーに掛け、ベッドの上に用意されていたガウンに着替える。部屋は二階だから、窓の外、眼下にホームが見える。列車が動きはじめたとき、もうホームには人影は無かった。さつき立っていた十人ぐらゐの人間はみんな乗り込んでしまったらしい。

松江行きは同市で開催中の第三十二回世界アマチュア囲碁選手権戦出場の日本代表選手、平田博則氏の応援のためだった。平田氏を応援に行くのは、わたくしが平田博則選手の一弟子であるからである。師匠が

ントで順位を決める。上位は20〜40代がほとんどで、10代前半も少なくない。ところが平田さんは54歳で初出場し、69歳で出場した平成7年の17回大会では世界一に。18回以来大会から遠ざかっていたが、昨年9月の日本代表決定戦で若手を破り、8度目の出場を決めた。84歳は、ペルーの選手が持っていた79歳の記録（25回大会）を上回る。（伊藤洋一）

右のようなことである。前代未聞の八十四歳という高齢で、師匠平田博則氏が日本代表として出場するのであるから、これは弟子にとつては驚天動地の大会事件である。一弟子たるものは、会場がどこであっても、なにをおいても駆けつけなければいけない。

ここで、さらに何故このわたくしが平田博則氏の一弟子と称しているか、である。これはわたくしが平田先生が学校で数学をお教えることになった数少ない第一番目の生徒のひとりだったことによる。

昭和二十五年のことだ。六十年以上前である。当時わたくしは成蹊という高校の三年生だったが、その年のこの学校に文理大学卒業はやほやの平田博則青年が数学教師として赴任してきた。そうしてわたくしのクラ